

Title	＜翻訳＞ フレイ神官ラヴンケルの物語(2)
Author(s)	菅原, 邦城
Citation	大阪外国語大学学報. 22 p.125-p.146
Issue Date	1970-02-10
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80373
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

フレイ神官ラヴンケルの物語 (2)

菅 原 邦 城 (訳註)

HRAFNKELS SAGA FREYSGOÐA

—Translated from the Old Icelandic and annotated—

by Kumishiro SUGAWARA

XI

ある朝早くソルビョルンは眼をさました。彼はサームをゆりうごかして、起きてくれと言った——「わしは眠れないんじゃ」

サームは起きて、服を着た。彼らは外に出て斧川 (Øxará)¹⁾ に下りてゆき、橋の下まで来た。彼らはそこで顔を洗った。

ソルビョルンはサームに言った、「わしは、おまえがわしらの馬をつれてこさせてわしらは家に帰る仕度をするのがいいと思う。今となっては、わしらには不名誉以外の何もかも予想できないからな」

サームは答える、「そうだろうとも。なにしろあんたはラヴンケルと争う以外のことをやる気はなかったしな。自分の身内の補償を要求する権利のある者なら多くは喜んで受入れた条件をあんたは承知しなかったんだからな。あんたは、わしらやこの件であんたの味方をする気のない者全部を、意気地がないと責めた。しかし、何かやれるという望みが尽きはてるまで、わしは絶対手をひきはしないさ」

これはソルビョルンを感動させて、彼が泣いたほどだった。その時二人は、川の西で自分たちが坐っている所より少し下手に五人の男がある小屋から出てくるのを見た。先頭を歩いている男は背が高く、体格は頑丈ではなかった。彼は木の葉緑の外套を着、手には飾りをほどこした剣をもち、整った赤ら顔の風采の立派な男で、その髪は薄栗色で豊かだった。この男は、頭の左側に捲毛があったので、(他の者から)容易に見分けられた。

サームは言う、「さあ、立って川の西側に行って、あの男たちに会おう」

彼らは川に沿って下っていった。先を歩いていた男がまず二人に挨拶して、彼らは誰かと訊いた。二人は名前を告げた。

サームはこの男に名前を訊ねたが、彼はソルケル (Þorkell) といい、スィオースタル (Þióstar) の息子だと言った。サームは、相手がどこの出身で、家がどこにあるのか訊いた。相手は、家系と生まれは西部湾の者であって、鱈ヶ湾 (Þorskafjörður) に家をもっていると言った。

サームは言った、「あなたは主領ですか？」

そんなものではないと相手は言った。

「それじゃ、自由農民²⁾ですか？」とサームは言った。

そうではないと、相手は言った。

サームは言った、「それでは、あなたはどんな方ですか？」

彼は答える、「わしは放浪者³⁾で、アイスランドにはこの前の冬にやってきた。外国に七年間いて、ミクラガルズ⁴⁾に行き、ギリシア王の家来になった。だが今は兄のところにいる。兄はソルゲイル (Þorgeirr) という名だ」

「その方は主領ですか？」とサームは言う。

ソルケルは答える、「たしかに鱈ヶ湾と西部湾 (Vestfirðir) では主領だが」

「この民会にお出でですか？」とサームは言う。

「うん、間違いなくここに来ている」

「どれだけの部下をお連れですか？」

「七十人はいる」とソルケルに言う。

「あなた方にはもっとご兄弟がおありですか？」とサームは言う。

「三番目が<いる>」とソルケルは言う。

「それはどなたですか？」とサームは言う。

「ソルモーズ (Þormóðr) という名で」とソルケルは言う、「白鳥岬のガルザル (Garðar á Alptanesi) に住んでいる。ボルグ (Borg) のソーロールヴ＝スカッラグリームソン (Þórólfur Skallagrímsson) の娘ソールディース (Þórdís) を妻にしている⁵⁾」

「わたしらに援助をして下さいませんか？」とサームは言う。

「おまえは何を必要としているのだ？」とソルケルは言う。

「主領の援助と力です」とサームは言った、「わたしらはいエナル＝ソルビャルナルソン殺しでラヴンケル＝ゴーズィと争っているのです。ですがあなたの援助があれば、訴訟に期待がかけられるでしょう」

ソルケルは答える、「わしは、今言ったように、主領ではない」

「他のご兄弟と同じく主領の息子なのに、あなたはどのように差別されているのですか？」

ソルケルは言った、「わしはゴーズィ権をもてなかったとは言っておらん。そうではなくて、外国にゆく前にわしの権利を兄のソルゲイルに譲ったのだ。兄がもっているかぎり安全だと思うので、あれ以来返してもらっていない。兄に会いにゆき、助けを求めろ。勇ましく気高い立派な男で、あらゆる点で育ちがよく、若くて功名心に逸やる男だ。このような男が一番、おまえらに支持を与える見込みがある」

サームは言う、「あなたがわたしらと一緒になければ、兄さんから（助けを）得られんでしょう」

ソルケルは言う、「殺された身内のために訴訟を起こすのは、いうまでもなく必要なことと思

うので、わしはおまえたちに反対するよりは、味方になることを約束しよう。さあ、おまえたちは先にわしらの小屋に行き、その中に入っておれ。男連中が寝ている。小屋の中の奥に吊り床⁶がふたつあるのが見えるだろう。そのひとつからはわしが起きてきたが、別のには兄のソルゲイルが休んでいる。兄は民会に来てから、足に大きな瘰癧ができて、このため夜ほとんど眠っていなかったが、昨夜瘰癧が破れ、芯がとれた。その後は眠っている。足の高熱のために、足を毛の上掛から踏台に突出している。老人が先に小屋に入れ。老人は眼も弱く、年をとっているとも思われる。おまえはな」とソルケルは言う、「床のところに行ったら、大仰に躓き、踏台の上に倒れろ。それから縛ってる指を掴んで勢いよくひっぱれ。そして兄がどんなふうに反応するか見てみる」

サームは言った、「あなたは役に立つような助言ができるでしょうに。これは得策だとは思えませんが」

ソルケルは答える、「わしの言ったことをするか、わしに助言を求めないか、このうちのどちらかをおまえらはやるべきだ」

サームは語って言う、「この人の助言するように、やらねばならんだろう」

ソルケルは、後で行くと言った、「わしは部下を待っているのぞな」

註

1) Þingvöllr を南北に流れる川。ここで言及されている橋は、今日 Karastaðastígur と呼ばれる道とこの川が交叉する所に、あるいはその附近にあったと思われる。

2) bóndi (本来は動詞 *búa* 「住む」の現在分詞で、「定住する者」が原意、cf. OE *bōanda*, *būanda* (<ON)). 中世スカンディナヴィアでこの語は、「土地耕作者・土地所有者・自由民・(他の階級に対する)農民層の者」さらに「夫・一家の主」を意味した。アイスランドでは、小自作農から豪農までの広いグループを指した。アイスランド共和制社会は、四つの農民階層からなっていた。その中心は、自由農民 (*búi*, *búandi*, *bóndi*) で、自作農である。その最大の社会的権利は、民会を開くこと (*þingheyjandi*) であった。比較的初期の時代に土地が少数の有力者に集中し、その必然的結果として小作制が生じた。これを担ったのは、小作農 (*leiglingur*, *leigliði*, *landseti*) である。彼らも自由民であるが、その社会的権利は自由民よりも制限があった。土地所有者と小作人との関係は、一種の契約関係であったといわれている。ほかに小作農として早くより、作男 (*búðsetumaður*) がいて、彼らも自由民たりえたが、その権利は、前二者に比べて限りがあった。第三の階層は解放民 (*leysingi*) で、これは私有民が自己の所有者によって解放された者と、自身で自由を購う者とがあり、自由な自作農になれたが、社会的権利を享受できなかった。最下層は私有民 (*m. præll*, f. *ambátt*, n. *man*) で、全くの奴隷であった。後二者が前二者に労働力を提供した。

なお、キリスト教導入後には聖職者が有力な社会階層をなした。

bóndi の語は、スカンディナヴィア本土で軽蔑の意味に使われるようになっていったのに対して、アイスランドでは一種の敬称として使われた。この用法もその一例である。サーガにみられる有名な主人公の例：Njáll bóndi, Illugi b., Þorsteinn b., Björn b. Einarson. Cf. *KTNM* bd. II, 1957, col. 84, bd. VII, 1962, col. 148 f., bd. X, 1965, col. 462, 525 f.

3) 註VIII4)を参照(「学報」21号, p. 147)。

4) 註III 1)を参照(*ibid.* p. 140)。

5) このサーガでは、スィオースタルの息子としてソルモーズの他に、ソルゲイルとソルケルがあげられて

いる。しかし他の資料では、この物語で重要な役割を演じている後二者が全く語られていない。白鳥岬のソルモーズの名は『開拓の書』にみられるが、これではソルレイヴの娘スリーズ (Þuríðr Þorleifsdóttir) が彼の妻とされている。一方、ここでソルモーズの妻とされているソールディースは、『エギル＝スカッラグリームソンの物語』 (*Egils saga Skallagrímssonar*, ch. 77) 等では、第5代の法の宣言者グリーム＝スヴェルティングソン (Grímr Svertingsson, 1002-03) と結婚したとされている。ところで、スィオースタルの一族はこのサーガにあるように西部地方の出身ではなく、本来南部地方の白鳥岬の住民だった。さらに、二人の兄弟が西部と南部の相異なる地方に主領となっていることも、理解に苦しむ点である。以上のようなことから、ソルゲイルとソルケルの二人を作者のフィクションとみなすのがより妥当であろう (cf. *Hrafnkatla*, p. 10 ff.).

6) húðfat (pl. *húðfat*) ハンモック状の吊りベッド。

X

さて、サームとソルビョルンは小屋に来た。そこでは男たちがみんな眠っていた。二人は、ソルゲイルがどこに寝ているか、すぐわかった。老ソルビョルンがまず入り、勢いよく蹶いた。それから吊り床のところに来ると、踏台の上に倒れ、弱っていた指を握り、激しく手前にひっぱった。それでソルゲイルは眼をさまし、床の上で飛上り、病人の足を踏みつける慌て者は誰だと訊いた。しかし、サームと老人は一言も口をきかなかった。

その時ソルケルが急いで小屋に入ってきて、兄のソルゲイルに言った、「兄さん、そんなにこのことに怒ったり、興奮したりしなさんな。あんたを痛めつけようとしてやったんじゃないから。多くの者は、自分で思ったよりも悪くやってしまうことがある。とても気が重い場合に、あらゆることに気をつけるのは多くの者にはなかなかできないものだ。それに兄さん、重い病氣にかかったあんたの足が痛むのは当りまえのことだし、このことはあんたが誰よりもよく知っている。しかし、この老人は息子が殺されてその補償もとられず何にでも事欠くのは、それ以上につらいだろう。これは老人が一番よく感じているだろう。気にかかることのある者が、あらゆることによく気をつけられないのは、考えられることですよ」

ソルゲイルは言う、「わしがその息子を殺したんじゃないのだから、彼はこのことでわしを責めるべきではないし、わしにその復讐もできないだろうが」

「あんたに復讐しようとしたのではありません」とソルケルは言う、「あんたに思ったよりも強く当たってしまったのです。それはまた衰えた視力のためで、老人はあんたの助けを頼みにしているのです。年取った貧乏な男を助けるのは、男らしい振舞い¹⁾です。老人は息子の補償を求めているが、これは必要に迫られたことで、欲深さのためではないのです。主領は誰もこの二人に援助を与えようとせず、非常な卑劣さをみせているのです」

ソルゲイルは言った、「この男たちは、誰を訴えているのだ？」

ソルケルは答えた、「ラヴンケル＝ゴーズイが正当な理由もなく、ソルビョルンの息子を殺したのです。あの男は次から次へと悪業をするが、誰にもその補償をしようとしたことがない」

ソルゲイルは言う、「わしも他の主領たちと同じくしなけりゃならんだろう。わしはラヴンケルと争うほどにこの二人と親密ではない。わしは思うのだが、ラヴンケルは自分と争う者に対し

て毎夏同じようにやっており、大多数の者は、名誉らしいものはほとんど得ることがないか、全く得ずじまいだ。だから、大多数の者は不必要なことを敢えてしようとししないのだろう」

ソルケルは言う、「もしわしが主領だったら、ラヴンケルと争うのは得でないと思ったかもしれない。しかし（今は）そのように思わない。みんながこれまで困らされている者を相手にするのは、全くよいことと思われるから。またラヴンケルをいくらかでも負かすことは、わしやそれをする主領の名誉を大いに高めると思う。しかし、わしが他の者たちと同じようになったとしても、恥をかくもんでもない。多くの者に起こったことは、わしにも起こるだろうから。危険を犯す者は、それだけのものを得る²⁾」

「わしは」とソルゲイルは言う、「おまえがどれほど、この男たちを助けたいと考えているかよくわかる。だから、おまえに主領の地位と権利を譲ろう。おまえは、わしがもっていたのをもて。その後わしらはどちらも同等になる。そしておまえは助けたい者を助けろ」

ソルケルは言う、「わしは、兄さんが主領の地位をできるだけ長くもっているのがいいと思う。あんたはわしら兄弟の中で多くのことについて一番よく知っているのだから、あんたのような人以外にはそれをもたせたくない。しかしわしなら、まず何をやっていいのかわからないだろう。でも兄さん、あんたはわしがアイスランドに帰ってから、多くのことに嘴をいれなかったのを知っている。わしは自分の見込みがどんなものか、わかっているつもりだ。捲毛のソルケル³⁾は、自分の話しがもっと重ぜられるところにゆくようになるかもしれんよ」

ソルゲイルは言う、「弟よ、おまえが不気嫌になるとどんなふうになるか、わしはよく知っている。どんな具合になるか＜わしは＞わからんが、おまえの望むように、この男たちに援助を与えよう」

ソルケルは言う、「助けることがよりよいと思うことを頼んでいるだけです」

「この男たちはその訴訟を成功させるようにどれだけのことがやれると思うのだ？」とソルゲイルは言う。

「それは今日話したように、わたし共は主領の支持が必要ですが、弁護はわたしがやります⁴⁾」

ソルゲイルは、彼らを助けるのはよかろうと言った、「ところで、訴訟はできるだけ手落ちなく起こすことだ。ソルケルと同じようにわしも、裁判が始まる前におまえたち二人はソルケルのところにいつてるのがいいと思う。おまえたちは（これまでの）苦しみへのお返しとして、慰めを得るか、以前よりも酷い侮蔑・難儀や憤慨の種を得るかのはいづれだろう。さあ、おまえたちは帰って陽気にしておれ。ラヴンケルと争うのなら、しばらくは頑張る必要があろうからな。しかし、わしらがおまえたちに助けを与えたことを誰にも言うな」

こうして彼らは自分の小屋に戻り、機嫌がよかった。みんなは、二人が出かける時は塞ぎこんでいたのにどうしてこう急に気分をかえられたかと不思議がった。

註

1) drengskapr この語は、ノルド文学における最高の理想の人物に対する用語である。drengrは本来、

王候の従者のひとりという。これら従者は、仲間の中であらゆる行いで優れた者を本当の男と考え、それを drengr góðr「立派な男」と呼んだ。文学作品では、この概念が一般的である。他の作品からの例；*Leifr fann menn á skipflaki ok flutti heim með sér. Syndi hann í því ína mestu stórmennesku ok drengskap, sem mǫrgu qðru, er hann kom kristni á landit, ok var jafnan síðan kallaðr Leifr inn heppni.*（レイヴは難破した人々を見つけ、一緒に家につれて帰った。他の多くのことと同じくこのことでも、彼は非常な大度と男らしい振舞いをみせた。またキリスト教をグリーンランドに伝えたこともそうであり、それ以来ずっと彼は、幸運者レイヴと呼ばれた）——*Eiríks saga rauða*, ch. 5. Cf. *KLNM* bd. III, 1958, col. 307 ff.

2) hefir sá ok iafnan hættir.「不入虎穴，不得虎子」に相当する諺。

3) Þorkell leppr ソルケルは、その捲毛の故にかように綽名された。IX章にあるソルケルの容貌に関する部分を記憶されたい。

4) 原テキストには話し手が誰か書かれていないが、前後関係から判断して、それはサームであろう。

XI

さて二人は、裁判が始まる¹⁾まで、小屋に居た。それからサームは部下を召集して、法の岩 (lögberg) に行った。そこで裁判が開かれたのである。サームは大胆にも法廷に向かった。彼はすぐに証人を呼びあげ、正当な国法に従い、訴訟上の手落ちもなく堂々とラヴンケル＝ゴーズィに対する訴えをした。これに続いて、スィオースタルの息子達が大勢を従えてきた²⁾。西部地方の者は全部彼らを支持した。スィオースタルの息子達は人望のある男のようだった。サームは、正しい裁判手続きに従って彼のために申し述べる者がいあわせなかったなら、ラヴンケルに（自分を）弁護するように求めて、法廷での訴えを終えた。サームの訴えに対して大きな喝采があった。誰もラヴンケルのために弁明しようとは言わなかった。

人々はラヴンケルの小屋に走ってゆき、事態がどうなったかを知らせた。彼はすぐ飛び出し、部下を集めて法廷へ＜向かった＞。そこでは大した抵抗もないだろうと彼は思った。また、自分に対する訴えを嫌うように、つまらん連中を仕向けてきたとも思った。サームのための法廷を解散させ、彼を裁判から追っ払うつもりだった。しかし、今度はうまくゆかなかった。多くの者が行手を塞ぎ、ラヴンケルは近寄れなかった。ラヴンケルは力づくで遠くに押しやられ、彼を訴えている裁判を聞くこともできなかった。彼が自分の弁護をやろうとするのは容易でなかった。

一方サームは、法の範囲ぎりぎりまで裁判を進め、ついにラヴンケルはこの民会で法外者³⁾となった。

ラヴンケルはただちに小屋に行き、馬を連れてこさせて民会から去った。彼は、今度のような結果にあったことが全くなかったので、裁判の結論に腹をたてた。その時彼は東のヒース谷荒原 (Lyngdalsheiðr) へ行き、それから東のスィーザへ出、ラヴンケル谷の家に着くまで途中とまらなかった。アザルボールに住んで、まるで何事もなかったかのようにしていた。

他方サームは民会に残り、大層威張って歩いた。多くの人はラヴンケルが恥をかいて家に帰ったのを小気味よく思ったし、彼が多くの人に不正を働いたのを忘れなかった。

註

1) *dómar fara út* 裁判所 (sg. *dómr*) が複数形であるところからみて、作者は四地区裁判所を念頭に置いていたと考えられる。

アイスランドは960—95年頃、政治的に東西南北の四地方 (sg. *fjórðungr*, pl. *fjórðungar*) に分割された。北部地方だけは住民感情が原因となって四地区民会をもったが、残りの地方は各々三地区民会をもった。しかし北部地方の大民会における議決権は他地方と同等のものと定められた (cf. *Íslendingabók*, p. 21)。

この分割の際に、それまであった大民会裁判所 *Alþingisdómr* にかわって、各地方に地方裁判所 (sg. *fjórðungsdómr*, pl. *-dómar*) が設置された。この裁判所はそれぞれ、*Austfirðingadómr* (東)、*Vestfirðinga-* or *Breiðfirðingadómr* (西)、*Rangæringadómr* (南) 及び *Norðlendinga-* or *Eyfirðingadómr* (北) とよばれた。この裁判所は、同一地方の複数の民会地区に跨る事件を扱ったが、これはまた地区民会に対する控訴裁判所でもあった。

サーガの作者が、この事件を960年以前に設定したのなら、地方裁判所がまだ設けられていない時となつて、*dómar* という複数形の使用は矛盾と考えざるを得ない。一方、10世紀の中期以降の事件とすれば、ある地方の事件を全島的な大民会に持出すことはおかしいのである。いづれにしても、この場合に作者の法律知識に混乱があるものと推測される。また裁判が法の岩で進められたという例は、他の資料には見出せないという (cf. *Hrafnkatla*, p. 47)。

fara út 「外に出る、出発する」という句は、法の岩より始まる行進を指している。法によれば、*logsgugumaðr skal fyrstr ef hann hefir heilindi til, þá eigu goðar at ganga með dómendr sína* (法の宣言者は健康であるならば、先頭を歩み、次に自己の裁判官を伴った主領が進まねばならない; *Grágás* I, p. 45)。また、*logsgugumaðr skal ráða ok at kveða hvar hvergi dómr skal sitia* (法の宣言者は、各裁判所がどこで開かれるべきかを決定し、発表しなければならない; *loc. cit.*) との規定から判断して、裁判は民会広原の一定の場所で開かれたのではなかったと考えられる。

2) これは、ラヴンケルの支持者が法廷に達して彼を弁護するのを妨げ、サームを掩護するための実力行使である。アイスランド共和国には警察機関が存在しなかったため、本文次段にみられるラヴンケルの考えのように力において原告側よりも強い被告側は裁判そのものをこわしたり、さらに判決を無視することもありえた。

3) *alsekr* 共同社会の法律の保護と恩典を剝奪された者。*skógarmaðr* 「森の男」の意、追放されて森＝人の住まない所に逃げこんで隠れ住むため)と同義で、この刑は*skóggangr* (「森入り」の意) とよばれ、当時のアイスランドにおける最高刑であった。法律の規定によれば、法外者は*ócell* (食糧を与えられるべきでなく)、*bráðandi qll bjargráð* (いかなる援助も勧められるべきでなく)、もし国外に逃亡したなら、*eiga eigi útkvæmt* (帰国を許されない) のであった。法外者は、アイスランド国内では誰にでも殺されえたり、国外ではアイスランド人によってのみ殺されえた。またその財産は次章に描かれているように、没収され、その子孫はこの財産に対して相続権を主張できなかった。*Grettis saga*. 79章には、この最高刑は20年以上にはわたらないとあるが、その傍証はなく、法律や他のサーガによれば、これは終身刑であったと考えられる。

法外者の首には賞金がかけられた。これは通常1モルク (1 *mörk* = 8 *aurar*: 金又は銀8オンス) であるが、放火殺人等の凶悪犯罪のため大民会で殺人罪の判決を受けた者には3モルクであった。

法外者は、他の法外者を殺すこと、係争相手との示談、及び*logrétta* (「法の囲い」の意、共和国の立法機関) の恩赦によって、その刑を減ぜられることができた。

この最高刑に次ぐものは、*fiqrbaugsgarðr*（国外追放）で、この刑に処せられた者は *fiqrbaugsmaðr* とよばれ、判決を受けた時から3年以内に国外に出て3年間外国に留らねばならなかった。外国滞在中、その身体の安全は保証され、3年後に帰国して以前通りの生活をする事が許された。3年以内に国外退去を実行しない場合には、その刑は最高刑に引き上げられる。*fiqrbaugr*（「生命の指輪」の意、助命されるのに支払う罰金）は1モルクで、この支払いを怠ると最高刑に処せられた。また同一人物が同一裁判区で二度国外追放の判決を受ければ、法外者とされた。さらに国外追放の刑は後でより重くすることもできたので、受刑者はアイスランドに帰国できなくなることもありえた。Cf. *KLNM* bd. IV, 1959, col. 603 ff.

XII

サームは、民会が終るまで留まった。それから人々は帰宅の準備をした。彼は兄弟たちに援助の礼を言ったが、ソルゲイルは笑いながらサームに、事がどのように運んだと思うかと訊いた。彼は、（うまくいったと）肯定した。

ソルゲイルは言った、「前よりもよくなったと思うか？」

サームは言った、「ラヴンケルは長く忘れられない恥をかいたと思います。これには大きな財産がついてますからね」

「財産没収裁判¹⁾が行われないうちは、あいつは法外者とはいえないし、この裁判はあいつの屋敷でやらなければならない。これは武器再使用の後十四日目となっている」

ところで、人々が民会を去る時を武器再使用という²⁾。

「また」とソルゲイルは言う、「ラヴンケルは家に帰ってアザルボールに住みつづける気だと思う。おまえたちを無視して主領権をもちつづけるつもりだろう。ところが、おまえの考えていることはせいぜい、できることなら、今の屋敷に帰って住もうということだろう。わしが思うには、おまえはあいつを法外者とよべるほどの裁判をした。だが、おまえがもっとけちにやらなければ、あいつは大多数の者に以前通りの威かしをやるだろう」

「わしはそうするのをちっともかまわないが」とサームは言う。

「おまえは元気な男だなあ」とソルゲイルは言う、「弟のソルケルはおまえを見殺しにすることはないだろう。弟は、おまえとラヴンケルのことが片づくまでは、おまえの味方をするだろう。そうすれば、おまえは安心しておれるというものだ。わしらが（この件で）一番力をつくしたから、わしらはおまえたちを助けるのに全く因縁が深いと思うだろう。今度だけわしらはおまえと一緒に東部湾にゆこう。ところで東部湾にゆく道で、本道でないのを知っているか？」

サームは答えた、「同じ道をゆけます」彼が東部地方からやってきたのと同じ道である。

サームは、このことに喜んだ。

1) féránsdómr 前章の註4)に略述した fjörbaugsmaðr と skógarmaðr に対する一種の執行裁判。その規則と方法については、本章と次章においても比較的詳しく示されているが、法律では次のように定められていた。*pat er mælt at hverr þeirra manna er sekr er orðinn, þá skal eigi féránsdóm eptir…… ok eiga .xiii. nóttum eptir vápnatak at heimili þess er sekr er orðinn í qrvarshelgi þar er hvárki sé akr né engi.* (有罪となった者は、後に財産没収裁判を受けなければならない……………これは、民会閉会より十四昼夜後に有罪と決定した者の敷地において、耕作地でもなく牧草地でもない、矢の届く範囲内の聖域で行われなければならない; *Grágás* I p. 112) .また、*menn skulu svá koma til dómsins at nefndr sé fyrir miðian dag* (人は召集された裁判に正午以前に来なければならない; *ibid.* p. 116) . その場所について、さらに細かく、*Dóm þann skal nefna garðs þar er hvárki sé akr né engi firr garði en í qrskotshelgi við garðinn* (人はこの裁判を(屋敷畑を囲む) 柵の外で召集しなければならない。その場所は、耕作地でもなく牧草地でもなく、また柵より矢の届く聖域よりも速くであってはならない; *ibid.*, p. 84) と決められていた。この裁判は、刑の決定が当事者間の示談あるいは調停によってなされた場合でも行われるとされていた。その場合、裁判は次回の大民会の後14日後に行われると定められた。(cf. *KLNM* bd. IV, 1959, col. 221 f.).

2) vápnatak (cf. OE *wæpen-getæc*, E *wapentake*) この語は、アイスランドの法律において、民会の閉会時を意味する。これは、民会の開期中は武器の使用が禁止され、参加者が民会を去る時になってはじめて武器を手にするのを許されたためであろう。この語の原初的意味は、以下のタキトゥスの文によりわれわれに示されているのではなかろうか。*sin placuit, frameas concutiunt: honoratissimum adsensus genus est armis laudare.* (もし(提案が) 気に入れば、槍を打鳴らす。最も名誉な同意の方法は武器で賞讃することである; Tacitus: *Germania*, ch. 11).

ところで、大民会の会期は2週間で、開会日は時代により少しずれる。まず初期の頃は夏の十週目の木曜日(六月十一日より十七日の間の1日に当る)であったが、999年に十一週目の木曜日(六月十八日より二十四日の1日に当る)に変更された。さらにアイスランドがノルウェー王の完全な支配下に入った後は、六月二十九日が大民会開会日とされた。

XIII

ソルゲイルは部下を選び抜き、四十名を同行させた。サームもまた四十名の部下をつれていった。一行は、武器と馬の用意がよくできていた。その後彼らは同じ道をゆき、夜明け近くに氷河谷に来、川の橋を渡った。それは、彼らが財産没収裁判を行える朝であった。

その時ソルゲイルが、どのようにしたら一番よく不意打ちをかけられるかと訊ねた。サームは、このことをやる方法を知っていると言った。

彼はすぐに道から逸れて、峻しい岩山に上った。それからラヴンケル谷と氷河谷の間の台地に沿ってゆき、とうとう彼らはアザルボールが下にある山麓に来た。荒原へは草の茂った小道があったが、谷へは急な坂があり、その下に屋敷があった。

そこでサームは馬から下りて言った、「馬を放し、二十人は見張りをする。わしら六十人は屋敷を攻めよう。(屋敷では) 起きている者はほとんどないだろう」

それから彼らはそうしたが、それ以来そこは馬の細道 (Hrossageil) とよばれた。彼らは屋敷を急襲した。時刻は、朝五時すぎだった。誰も起きていなかった。彼らは戸を棒で打ち破り、飛び込んだ。ラヴンケルは自分の床に寝ていたが、彼らはそこで彼と武器を使える使用人全部を捕えた。女子供は、ひとつの建物に追いやられた¹⁾。前庭に小屋があった。そこと物置の壁には物干し竿がかかっていた。彼らは、ラヴンケルと使用人をそこへ連れていった。

そこでラヴンケルは、自分と部下のために多額の身代金を申しでた。だが、これは許されなかった。すると彼は使用人の命乞いをして言った、「この者たちは、おまえたちとの件には何の関係もない。一方おまえたちがわしを殺したとしても、わしにとって不名誉とはならんし、わしはそれを拒みもしない。しかし恥知らずな取扱いは断るし、そうしてもおまえたちの名誉にはならん」

ソルケルは言った、「おまえは敵には親切でなかったと聞いているが、今度はそれを自分で味わうのもいいだろう」

それから彼らはラヴンケルとその部下を後手に縛りあげた。彼らは小屋をこじあげ、杭からロープを外した。そして小刀を取りだして敵の腿に穴をあけ、これをロープに繋ぎ、竿に投げあげた²⁾。こうして八人の男と一緒に縛ったのである。

さて、ソルゲイルは言った、「ラヴンケル、おまえはいい態になったな。今うけているような恥を誰からかうけにゃならんとはおまえらしくもないと思ってるだろうな。ところでソルケル、おまえはどうするつもりだ？ ここにいてラヴンケルを見張っているか？ それともサームと(屋敷の) 柵の外に出て、矢の届く範囲³⁾内で、畑でも牧草地でもない石山で財産没収裁判をやるか？」

これは、太陽が真南にある時刻に行われねばならなかった。

ソルケルは言った、「わしはラヴンケルのところにいよう。この方が一番何もしなくてもいいように思うから」

そこでソルゲイルとサームは出かけ、財産没収裁判を行った。その後彼らは戻ってきて、ラヴンケルと部下を下ろし、庭に坐らせた。血が彼らの目の所まで落ちていた。

そこでソルゲイルはサームに、自分のしたいようにラヴンケルをあしらえと言った、「今さらこいつをそう敬まうこともあるまいと思うからな」

サームは答える、「ラヴンケル、二つの条件を出そう。ひとつは、あんたとわしの望む連中はこの屋敷を出てゆくこと。そうでなければ、殺されることだ。だが、あんたは養わなきゃならん者を沢山抱えているから、その面倒をみるのを許してやろう。また命が惜しかったら、家中をつれてアザルボールから出てゆけ。わしが決める財産をもってゆけ。ほんのわづかばかりだが。そしてわしがあんたの屋敷と主領権をもらう。あんたや後継ぎはこれに二度と権利を主張できん。またフリュート谷荒原の東より近くに住むな。もしこれを受け入れるなら、わしと約束をしなけ

ゃならん」

ラヴンケルは言った、「このような不面目よりは即刻の死の方がまだましだと多くの人には思われるかもしれん。だがわしは、他の多くの連中のように、許されるなら命を選びたいわ。何よりも息子たちのためにそうするのだ。もしわしが死んでしまったら、世間で立ってゆくのがむづかしくなるだろうからな」

それから、ラヴンケルは解^くかれ^を、サームに一方的裁断⁵⁾を認めた。サームは財産の中からやろうと思ったものをラヴンケルに分けてやったが、それは全くわづかだった。ラヴンケルは槍を携えただけで、他の武器をもたなかった。この日、ラヴンケルと一家はアザルボールを去った。

その時ソルケル⁶⁾はサームに言った、「わしには、おまえがどうしてこんなことをしたのかわからん。あいつに命を助けてやったのを、おまえが一番後悔することだろう」

サームは、なるようになるだろうと言った。

註

1) この種の争いでは、武器のもてない老人及び婦女子を成年男子から区別して、彼らに害を与えないのが社会的通念であった。

2) この場面は、作者が体験あるいは目撃したかもしれない十三世紀アイスランドの権力争いに明け暮れた不穏な世相を反映していると考えられる。同じような描写が、他の文献でも知られている。すなわち、ヤリメリク王(Jarimerichus)が海外遠征に出かけて国を留守にしている間、支配下のスラヴ人が反乱を起こしてデンマークの海岸地方を掠奪していた。ところがその最中に彼らは、帰国してきたヤリメリク王に遭い、その船隊を王により撃滅された。「その上に、王は彼らの首領たちに対して苛酷な報復をした。王は彼らの足に綱を通させ、これを狂暴な獣に堅く結びつけさせた。獣は猛犬に追われて走り、悲惨にも首領たちは樹の幹や石に、湿地や沼地へとひきずりまわされ、遂に八裂きにされてしまったのである」Saxo Grammaticus: *Danmarks krønike*, fordansket ved N. F. S. Grundtvig², 1962, II p. 118).

3) qrskotshelgr Grágásによれば、大二百(=240)尋とされていた。これは、約345.60mに相当する。

4) ラヴンケルの言葉は、古代ゲルマン人の処世訓ともいふべき『高き者の言』にみられる次の二連を想像させる。70 *Betra er lifðom/ok sæl lifðom; ey getr kvíkr kú; /eid sá ek upp brenna/auðgom manni fyrir, /en úti var dauðr fyr durom*. 71 *Haltir ríðr hrossi, /hiqrð rekr handarvanr, /daufr vegr ok dugir; /blindr er betri/en brendr sé; /nytr mangi nás*.

(70 生くるはよりよし/また生くるは幸いなり/生くる者は常に牝牛を得ん。(火葬の) 焔の燃えあがるをわれは見たり/富みし者のために/彼は己が門の前に死してありき。71 跛は馬に乗らん/腕無しは牛を追わん/ 罽は戦いにて功をあげん。盲はよからん/ 焼き殺さるよりは。死せる者は何の役にも立たぬなれば。 *Hávamál*, udg. af Jón Helgason, 1964.)

5) *siálfdoemi* 争いを解決するため、仲裁や裁判に委ねるかわりに、当事者の一方が他方に裁断の権利を認めること。この権利は、加害者よりも被害者に与えられるのが圧倒的に多く、後者は前者に対して自己の至当とする刑罰、補償等を決めることができた。裁判等で和解できない紛争の最終的解決法として、この方法がよく採られた。Cf. *Egils s.* ch. 84, *Njáls s.* ch. 36, *Gunnlaugs s.* ch. 10, etc.

6) 写本のすべてでソルケルとなっているが、XX章を考慮すれば、こはソルゲイルでなければならない(cf. *Hrafnkatla* p. 63)。

XIV

さて、ラヴンケルは東のフリュート谷荒原を起えて海津川の東部のフリュート谷の向う側に移った。川上にはロクヒッラ (at Lokhillu; Lokhilla「服棚」) という小さな屋敷があった。ラヴンケルの財産は農具分以上にはなかったもので、彼はこの土地を掛で買った。

この事件について人々はラヴンケルの横暴がどのような結果を得たか大いに話しあった。みんなは、恥辱は傲慢<の>一代記という昔の諺を思い出した。

この屋敷は、大きい見事な林であったが、家は腐っていた。このため、彼は土地をわずかな値で買った。ラヴンケルは、林が大きかったので余り経費を顧みず、林を伐って堂々たる屋敷を建てた。それ以後ラヴンケル屋敷 (á Hrafnkelsstöðum; Hrafnkelsstaðir) とよばれたものである。それはその後いつでも、立派な屋敷だといわれている。ラヴンケルは最初の年、そこで非常に苦しい暮しをした。彼は食糧の大部分を魚で賄った。ラヴンケルは屋敷の建築中とても働いた。ラヴンケルは最初の年、仔牛と仔羊を冬期飼育にとっておいてよく世話をしたので、危険を犯し(てとっておい)た家畜がほとんど全部冬を越せたほどだった。家畜一頭が、それぞれ約二つの頭を得た¹⁾ということができた。同じ夏、海津川は豊漁だった。そのおかげで地区の住民には家計の助けがあり、そのことは毎夏つづいた。

註

1) 同様の表現が他のサーガにもみられる。*Grímr rakaði brátt fé saman; vǫru tvau hqfuð á hvívetna því er hann átti* (グリーンはまもなく財産を得た。彼が所有したものにはどれでも頭が二つあった; *Íslendinga sögur* II, 1847, p. 14). 家畜が倍増したことを意味する。

XV

ラヴンケルの後、サムはアザルボールに世帯を構えた。その後彼は豪勢な宴会を開き、ラヴンケルのスィングメンだった者を全部招いた。サムは、ラヴンケルにかわって彼らの主領になるつもりであった。みんなはそれを承知したが、まだ迷っていた¹⁾。

スィオースタルの息子たちはサムに、部下には優しく、気前よく、助けになるように、自分を必要とする者の誰にでも助けとなるようにと忠告した。「そうしても、おまえが必要とする時におまえに従わん者は、(大した) 男ではない。おまえは勇敢な男だと思うので、あらゆることがうまくゆくように希望してこのことを忠告するのだ。よく警戒し、用心しろ。悪意ある奴らに気をつけるのは容易いことではないからな」

スィオースタルの息子たちは、フレイファクシとその群をつれにやらせ、あれほどに噂されたこの宝物を見たいと言った。そうして馬は家敷につれてこられる。兄弟は馬を眺めた。

ソルゲイルは言った、「この馬は屋敷仕事が必要だ。こいつらは齢でもう生きてゆけなくなるまで、人の役にたつ仕事をせねばならないというのが、わしの意見だ。しかし、この馬は他の馬より立派だと思えんがな。むしろ、多くの凶事の原因になったことでは、よくない馬だ。この馬がこれまで原因になった人殺しのほかに、もうこれ以上人殺しを起こしてもらいたくない。だから、この馬はもともと所有している者²⁾が受取るのが当を得るだろう」

それから、彼はフレイファクスイを原っぱに沿って連れていった。川に面してごつごつした岩があって、その前には深い淵がある。彼らはそこで馬を岩の上につれてあがった。スィオースタルの息子たちは、馬の頭に布を被せ、長い棒を取って馬を押しだした³⁾。首には石を結んだ。こうして彼らは馬を殺した。そこはそれ以来、フレイファクスイ岩 (Freyfaxahamarr) とよばれている。

その下手にラヴンケルが所有していた神所があり、ソルケルはそこに行きたがった。彼は全部の神から飾りを剥ぎとらせた。その後で神所に火をつけさせて焼き落した⁴⁾。

それから宴会の客たちは帰宅の仕度をした。サームは二人の兄弟に高価な贈物をやった。彼らはたがいに完全な友情を約束し、最上の友人として別れた。兄弟は西の湾に向かい、名声を得て鱒ケ湾に戻った。一方サームは、ソルビョルンを遊び小屋に住ませたので、彼はそこに住まねばならなかった。しかしサームの妻はアザルボールの彼の所に移り、サームはしばらくここに住んだ。

註

1) 彼らは望むなら、他地区の主領の保護を受けることもできたのである。註II 3), 5) を参照されたい。

2) フレイ神のこと。ここでは悪魔 *djǫfull* も作者の念頭にあったであろう。キリスト教が定着するようになると、悪魔が異数の神々の助けをかりて悪をなすと考えられるようになった。

3) 伝説や地名から判断して、ノルウェーでも同じ方法で動物を殺したと考えられる。また馬を殺す時、これに布を被せることもノルウェーで知られていたという (Nils Lid; *Norske slaktskikker* I, 1924, p. 181., p.137) .

4) この物語は時代を十世紀に設定している。これはキリスト教がアイスランドに導入される以前であり、また導入後でもかなり長い間異教信仰が根強かったことは他のサーガから容易に推察されるため、十世紀のアイスランド人が異教神を冒瀆することやその神所を破壊することは不可能であったろう。作者が異教にこうまで寛容になれなかった人物であったことから、作者に十三世紀の聖職者をあてる専門家もある。このアナクロニズムは、以前には、ソルケルが海外滞在中にキリスト教に改宗したための行為と解釈されたこともあった。Cf. *Hrafnkatla*, p. 33.

XVI

ラヴンケルは東のフリオート谷で、スィオースタルの息子たちがフレイファクスイを殺して神所を焼いたのを聞いた。

その時ラヴンケルは答える、「神を信じるのは、馬鹿げたことだと思う」

それ以後は絶対神を信じないと言った。そうしてそれ以来、神信心しないことを守りぬいたのである。

ラヴンケルは、ラヴンケル屋敷に住んで、一生懸命に財産を貯めた。彼はまもなく地区で大きな人望を得るようになった。誰もが、彼の望むように、坐ったり立ったりした¹⁾。

この時期に、ノルウェーからアイスランドに船が一番多くやってきた。ラヴンケルの時代に、その地区では一番盛んに開拓された²⁾。ラヴンケルに許可を求めずには、誰も安心して暮せなかった。すべての人は彼に支持を約束せねばならなかった。彼もまた自分の保護を約束した。ラヴンケルは海津川東方の土地全体を自分の支配下においた。この民会地区は、彼が以前にもっていたものよりもはるかに大きくなり、住民の数も多かった。この地区は海津川に沿ってスクリザ谷にまで達した。今や、彼の心には変化が生じたのである。彼は以前よりずうと好かれた。彼は助力と親切さでは以前と同じ気持をもちつづけ、大いに人望を得、あらゆる点で以前より穏やかで優しくなった³⁾。

サムとラヴンケルは、しばしば会合で会いはしたが、おたがいに（以前の）争いについて語ることは全くなかった。こうして六年が過ぎた。

サムは、スィングメンの間で人望が厚かった。というのは、彼が親切で温和しくて助けを惜しまず、あの兄弟たちが彼に忠告したことを忘れなかったからである。

サムは、とても洒落男であった。

註

1) vildi svá hverr sitia ok standa sem hann vildi. 「誰もが、彼の望むようにした」の意。

2) この個所は、明らかなアナクロニズムである。

最初の開拓の頃 (c. 870) から、*á lx. vetra yrði albygt, svá at eigi væri meiri* (六十年でアイスランドは開拓しつくされて、それ以後それ以上（の未開拓の土地）はなかったのである；*Íslendingabók*, p. 18)。したがって、ラヴンケルが生きていたとされる十世紀後半にはアイスランドで他人に与えるほどに未開拓の土地は見出されなかったと結論せざるをえない。

3) ラヴンケルの以前の性質については、II章を思い出されたい。

XVII

鯨湾 (Reyðafjörður) に一隻の船が大洋から入り、船長はエイヴィンド＝ビャルナルソンだということが伝えられている。彼は七年間外国にいた。彼は非常に諸芸に長じ、とても勇敢な男となっていた。彼に以前起きた事件がすぐ語られたが、彼は大して気にもかけないふりをした。彼は穏やかな男であった。

一方サームは、このことを聞くとただちに船へやってきた。こうして彼ら兄弟は嬉しい再会をした。サームは西（の自宅）に彼を招いたが、エイヴィンドはこれを快諾し、サームに先に家に帰って自分の荷物を運搬する馬を送り返してくれるようにと頼んだ。彼は自分の船を陸にあげて囲いをした¹⁾。サームは頼まれたようにやり、家に帰ってエイヴィンドに馬を送ってやった。彼は荷物の仕度ができると、ラヴンケル谷行きの準備をして鯨湾に沿って進んでいった。

彼らは五名だった。そして六番目は、エイヴィンドの沓取²⁾であった。これは、血筋はアイスランド人で、彼と縁続きだった。エイヴィンドはこの少年を極貧から救い、一緒に外国へ連れて行ってわが身のように世話をした。エイヴィンドのこの行ないはよく知られて、彼と並ぶ者はほとんどいないだろうというのが人の賞讃（の言葉）であった。

彼らはソーリ谷荒原（Þórisdalsheiðr）を進んでいったが、彼らの前に十六頭の荷を積んだ馬を追っていった。二人はサームの使用人で、三人は商人だった。彼らはみんな碁盤縞に染めた服³⁾を着て、立派な楯をもっていた。彼らはスクリザ谷を横切り、フリュート谷に到る薪ヶ原（Bulungarvellir）とよばれた台地を越えて溪谷川砂洲（Gilsáreyrri）に來た。川は東から流れ、ハッロルム屋敷（Hallormsstaðir）とラヴンケル屋敷の中間の所で（海津）川に注いでいる。彼らは海津川に沿って、ラヴンケル屋敷の方へと原っぱの下手を行った。さらに川上をまわって、小屋浅瀬（Skálavaði）から氷河川を渡った。それはちょうど朝の六時と九時の間であった。

ひとりの女が川にいて着物を洗っていた。男たちの一行を彼女は見た。この女中はリンネルの着物をそそくさと洗って、家に飛んでいった。洗濯物を薪の所に放って、家に駆けこんだ。

ラヴンケルはまだその時起きていなかった。また数人の友人が座敷に寝ていたが、使用人⁴⁾は仕事に出かけていた。これは干し草作りの時期⁵⁾であった。

家に入ると女は言った、「年を取ると臆病になるという昔の諺は、沢山の人にあてはまるよ。若い頃とった名声なんちうもんは、そのあとで自分が不名誉なことで汚して一度もそれ相当の仇を討たにゃ、大したこっちゃあるまいよ。そういうことが勇ましかった者に起こるとは驚きさ。父親の所で育って、あんたたちにくらべればとるにたらんと思われる者の生き方は（あんたたちとは）別のもんよ。一人前になると外国から外国へと旅をして、行く先々で有力者と思われ、そのため国に帰ってくると自分の方が主領たちよりも優ってると考えるようになる。エイヴィンド＝ビャルナルソンが、遠くまできらきら光るくらい立派な楯をもって小屋浅瀬の所で川を渡った。あの男は、復讐しがいのある立派な男だよ」

女中は熱心につづけるのであった。

ラヴンケルは起きあがって彼女に答える、「おまえの言うことは大方本当だろう。かといって、これについておまえの目論見が必ずしもよいというわけではないが。おまえはもっと面倒な仕事を背負ったことになるわ。急いで南の柳ヶ原（Víðuvöllr）に行き、ハッルステイン（Hallsteinn）の息子のスィグヴァト（Sigvatr）とスノッリ（Snorri）をよんでこい。武器のもてる者と一緒

にわしの所に急いで来るように言え」

彼は別の女中をロールヴ屋敷 (Hrólfssstaðir) へ、ロールヴ(Hrólfur)の息子のソールズ(Þórðr)とハッリ (Halli) 及び武器の使える者たちをよびにやった。この二人は、どちらも立派な素養のある男であった。

ラヴンケルはまた、自分の使用人をもよびにやった。彼らは全部で十八人になった。彼らは勇ましく武装して、前の (エイヴィンド) 一行と同じ所から川を渡った。

註

1) 夏の終りに来島すると、気候の関係で翌年の春までアイスランドから出てゆくことはできないとされていた。そのため船を陸にあげて、越冬のためにその周りを囲ったのである。

2) skótsveinn 召使いの少年のこと。このサーガと成立時期が大体同じとされる *Njáls s.*, *Gunnlaugs s.* が、大陸の浪漫主義に大きく影響されていることは広く認められている。これと対照的な位に峻烈なヴィーキング的人生信条を示しているのがこのサーガで、ロマンティズムの一片もみせていない。しかしながら、はしなくもこの一語によって作者は時代の影響をみせていることになる。この語は *Snorra Edda* にもみられる。

3) litklæði この種の衣服は見事な武器と同じく、外国で活躍した者や財をなした者の象徴であった。なお往時のスカンディナヴィアでは、黒地の質素な衣服が一般的であった。

4) vildarmenn (sg. *vildarmaðr*, 直訳すれば「好意の男」) 他から区別されて信頼を受けた者。鼠員の者。

5) heylaanir 七月及び八月。

XVIII

その頃、エイヴィンドとその一行は (フリュート谷) 荒原に達した。エイヴィンドは馬を西へ進め荒原の中ほどまで来た。そこは、熊路 (Bersagotur) とよばれた。汚ない湿地で、そこはまるで泥沼の中を進むようなもので、(泥が) 馬の膝や股まで、時には腹までくることがあった。しかし泥の下は、でこぼこした岩地のように固かった。西には大きな石の原¹⁾があった。

さて、彼らが石の原に来た時、少年が振返ってエイヴィンドに言った、「男たちがわたしたちの後を向こうから追ってきます」彼は続ける、「十八人います。黒っぽい服を着た男が馬に乗っています。ラヴンケル＝ゴーズィだと思えます。あの男を長いこと見てはいませんが」

エイヴィンドは答える、「わしらに何が起こるといふのだ？ わしには、ラヴンケルを怖れることは何もない。わしはあの男に逆らったことは<ない>。多分谷の西へ用事でもあって、友人にでも会いに行くのだろう」

少年は答える、「ラヴンケルはあなたに会うつもりだと思うのですが」

エイヴィンドは言う、「兄のサームとラヴンケルが和解してから二人の間に何があったかわし

は知らん」

少年は答える、「あなたに西の谷へ下りて行ってほしいと思います。あそこなら安全でしょう。わたしはラヴンケルの気性を知っています。あなたをつかまえられなかったら、わたし共には何もしないでしょう。もしあなたがいれば、あらゆるものが警戒されます。ですが、翼に獲物がいないければ²⁾、わたし共はどうなろうと構いません」

エイヴィンドは一行を離れるつもりはないと言った、「というのは、あいつらが誰かわからないからだ。わしは何も見きわめもしないで逃げだしたら、多くの人に笑われるだろう³⁾」

こうして彼らは石の原の西へと向かった。彼らの行手には、牡牛ヶ湿地 (Oxamýrr) という別の湿地があった。そこはとても草が茂っている。また非常に泥濘り、通りぬけることはほとんどできないほどだった。このため老ハルフレズは、遠廻りではあったが上手の道を開いたのである⁴⁾。エイヴィンドは湿地の西へと行った。馬が相当泥にはまって非常に手間どった別の一行は、荷物がないために速く進んだ。ラヴンケルの一行は今や湿地へと向かってきた。エイヴィンドの一行は湿地をぬけた。そこで彼らはラヴンケルと二人の息子を見た。

彼らは、エイヴィンドに逃げてくれと頼んだ、「わたしらは一番厄介な道を出た。あなたは、湿地が(ラヴンケルとわたし共の)間にあるうちに、アザルボールに着けるでしょう」

エイヴィンドは答える、「わしは自分が何も悪事をしたわけでもない男共から逃げるなど嫌なことだ」

それから彼らは台地に上った。台地には小山があった。山の端には風で裸にされた草原があった。そのまわりには小高い丘になっていた。エイヴィンドは草原に上った。彼は馬から下り、相手を待った。

エイヴィンドは答える⁵⁾、「すぐにもあいつらの用向きがわかるだろう」

そうしてみんなは草原に上って、石を掘りだした⁶⁾。

ラヴンケルはその頃、道から逸れて南の草原へ向かった。彼はエイヴィンドと言葉を交すこともせずにすぐに撃ちかかった。エイヴィンドは立派に男らしく防いだ。

エイヴィンドの杵取は、自分は闘いでは大した助けにもならないと思って馬に乗り、山の背の西アザルボールへと走って、サームに何が起きているかを伝えた。

サームは即座に仕度を整えて部下をよびにやった。彼らは全部で二十名になった。この一行はよく武装されていた。サームは東の湿地へと向かって、闘いの現場に走った。

その頃、彼らには決着がついていた。この闘いからラヴンケルは東へ去った。その時エイヴィンドと仲間の全部が倒れた。

サームはまず弟の死体を探した。この闘いは徹底的に行われ、五人全部が命を落した。ラヴンケルの側でも、十二人が倒れて六人が生き遁れた。

サームはそこで少しばかり休むと、部下にすぐ追跡するように言った。彼らはラヴンケルたちを追いかけたが、馬は疲れていた。

サームは言った、「あいつらには疲れた馬しかおらんが、わしらののは全部休ませているのだから追いつけるだろう⁷⁾。連中が荒原を出ないうちに追いつくのは間近だ」

その頃、ラヴンケルは東の牡牛ヶ湿地を越えきっていた。

両者ともさらに進んでゆき、サームはとうとう（フリオート谷）荒原の端に来た。そうして彼は、ラヴンケルが坂をはるか下へと行くのを見た。彼が下の地区に入りこむつもりなのだと、サームにはわかった。

そこで彼は言った、「わしらは、ここから引返さなきゃならん。ラヴンケルはたやすく仲間を集められるだろうからな」

サームはこう言って引返した。エイヴィンドが倒れている場所までやってきた。彼と仲間のために墓を作りはじめた。そこはエイヴィンド原 (Eyvindartorfa) , エイヴィンド山 (Eyvindarfjall) とかエイヴィンド谷 (Eyvindardalr) とかよばれている。

註

1) hraun 火山国アイスランドでは通常「溶岩台地」を意味する語である。しかしここでは、フェーロー語と同じく、「石がちで草の疎らな土地」を意味する (Cf. *IED* p. 283, M.A. Jacobson & Chr. Matras: *Føroysk-Donsk Orðabók*, 1961, p. 330)

2) pá er eigi dyr í festi. *dýr* (cf. OE *dēor*, OHG *tior*) を「動物、獲物」とせず、「高価な物、財宝」(cf. adj. *dýrr*; OE *diere*, *dýre*, OHG *tiuri* 'lieb, wert') と解釈する専門家もいる (cf. *Hrafnkatla*, p. 50)

3) エイヴィンドのこの言葉に、新しい型の英雄像が認められよう。これに対して、ラヴンケルには、長い眼でみて得策なら一度逃げることも吝かでないとする古い型の英雄像であろう。註XIII 4) をも参照されたい。

4) II章の後半部分を記憶されたい。

5) svarar ここは *segir* 「言う」とするのが正しかろう。さもないと、前文とこの文との間に脱文があると考えざるべきではなからうか。

6) brióta par upp griót nokkurt サーガ文学に広くみられる表現で、攻撃が予想されてその防御をするための準備をすることを意味する。

7) これは、サームの部下を励ますための嘘である。より疲れているのはアザルボールから乗りつづけてきた彼らの馬であって、ラヴンケルらの馬は鬩いの間にしばらく休むことができたであろう。

XIX

その時、サームは荷物を全部アザルボールにもってきた。家に帰るとサームは、自分のシングルメニに（翌）朝九時前に自分のところに来るようにとの使いをやった。彼はそうして（フリオート谷）荒原の東へ行くつもりだった。

「わしらの遠出は、ならねばならぬようになるだろうて」

夕方サームは床にはいった。そこには多数<の者>が集まっ<た>。

ラヴンケルは家に帰って、この出来事を語った。彼は食事を食べ、その後自分のところに部下を集めた。彼はこうして七十名を得て、それをひき連れて荒原を西へ横切った。彼はアザルボールを不意打ちして、サームを寝床で捕えて外へ引きだした。

そこでラヴンケルは言った、「サーム、おまえの有様は、わしがおまえの命を握るという少し前には考えもできなかったことになった。しかしわしは、おまえがわしにしてくれたよりはおまえに酷い男とはならん。おまえにふたつの条件を出そう。殺されるか、もうひとつはわしがおまえとわしとの間のことを裁断することだ」

サームは、自分は命を選びたいと言った。また、どちら（の条件）も厳しいと思うと言った。

そう思ってもよかろうと、ラヴンケルは彼に言った、「わたしたちはおまえにそうお返しできるのだから、もしおまえにそれだけの値打ちがあるのなら（今の）半分だけ親切にしてやるのだから。おまえはアザルボールを出て遊び小屋に下りて行って、あそこのおまえの家に住め。エイヴィンドのもっていた財産をもってゆけ。ここから他の財産をもって行ってはならん、おまえがここにもってきた物以外はな、こっちの方は全部もち去れ。わしは屋敷や財産同様わしの主領権をとろう。わしの財産は大層殖えたことだろうが、これをおまえは取ってはいかん。おまえの弟のエイヴィンドへの補償はない。おまえは浅ましくも以前の身内のために訴えを起こしたからな。またおまえは、（わしの）権力と財産を六年間もっていたから、弟のエイヴィンドの償いを十分受けとったことになる。それからエイヴィンドとその部下の死は、わしや部下の怪我より値打ちがあるとは思わん。おまえはわしを地区から<追出した>。しかしわしは、おまえが遊び小屋に住むのに甘じてやろう。おまえが赤っ恥をかくほど尊大にしなければ、それで十分だ。わしら両方が生きている間、おまえはわしの部下にならねばならん。わしらが不仲になればなるほどおまえに不利になっていくことを承知しておけ」

こうして、サームは家族共々遊び小屋に移って、そこにある自分の家に住んだ。

XX

きて、ラヴンケルはアザルボールで部下たちに土地を分け与えた。息子のソーリ（Þórir）をラヴンケル屋敷に住ませた。彼は（これらの）地区全部の主領権をもっていた。アースビョルン（Ásbiörn）は若かったので、父親のもとにいた。

この冬サームは遊び小屋に住んだ。彼は塞ぎこんで口数が少なかった。多くの人は、彼が自分の運命をこぼさないことに気づいていた。

ところが、冬で日が長くなり始めた頃、サームはひとりの男と馬三頭を連れて橋を越え、そこから茜ヶ谷荒原（Moðrudalsheiðr）を通して山の氷河川（Jökulsá）¹⁾を渡り揺蚊湖（Mývatn）

に達した。そこからフリオート荒原 (Fliótsheiðr) と光湖広原 (Liósavatnsskarð) を越えてゆき、西の鱈ヶ湾に着くまで休まなかった。その頃、ソルケルは (外国) 旅行から帰国したばかりであった。彼は外国に四年滞在した。

サームはそこに一週間滞在して休息した。それから彼は彼らに自分とラヴンケルの争いについて語り、兄弟に以前と同じように再び援助と支持を頼んだ。

ソルゲイル²⁾はその時、兄弟の側として余計多く答えた、「わしらの間 (の距離) は遠い。おまえが苦勞せずに権力をもちつづけられるように、わしらは (東部湾から) 引きあげる前に十分準備してやったと思ったんだが。おまえがラヴンケルに命を許してやった時これをおまえが一番後悔するだろうとわしが考えたようになったわけだ。わしらはおまえにラヴンケルの命を取るように勧めたが、おまえはひとりで決めようとした。ラヴンケルがおまえをおとなしく生き残らせ、おまえよりも勇敢だと思われる男をまず片づけるのに気を向けたことからみて、おまえとあいつのどちらが相手よりも頭があるか判断するのはむづかしくない。わしらはおまえのこの運のなさ³⁾を背負いこみたくない。自分の名誉を度々危うくするほどラヴンケルと事を構えたくもない。ここの方がラヴンケルの近くよりも安心だと思うなら、家族ぐるみここに移ってわしらの保護を受けるように勧めよう」

サームは、そうするつもりはないと言った。家に帰るとも言った。彼らに馬をかえてくれるように頼み、これはすぐに叶えられた。

兄弟はサームに立派な贈物をやろうとしたが、彼は何も受け取ろうとせず、兄弟に対して彼らは気が小さいと言うのであった。

彼は生きていた間に、二度とラヴンケルに逆えなかった⁴⁾。

一方、ラヴンケルは自分の屋敷に住んで名誉を保ちつづけた。彼は病死して、その墓はアザルボールから離れたラヴンケル谷にある。墓には彼と共に莫大な財物、彼の衣服全部と立派な槍⁵⁾が埋められたのであった。

彼の息子たちは主領権を得た。ソーリはラヴンケル谷に住んだが、アースビョルンはアザルボールに住んだ。二人とも共同で主領権をもって、大人物に数えられた。

こうして、ラヴンケルの話しは終る

(完)

註

1) Jökulsá uppi á fialli この川は、既出の氷河川とは異なるもので、揺蚊湖寄りの同名の他の川である (『学報』No.21, p.149の地図を参照)。このふたつの氷河川は今日それぞれ、*Jökulsá á brú* 「橋の氷河川」*Jökulsá á fjöllum* 「山の氷河川」として知られている。

2) 註XIII 6) を参照されたい。

3) gæfuleysi アイスランド人にとって、*gæfa* 幸運と *ógæfa* 不運の観念は一種の宿命観であって、サーガ

文学のモチーフのひとつである。その好例として、*Auðunar þáttir vestfirzkar* 『西部湾人アウズンの譚』 (*Auðunn. . . þótti vera inn mesti gæfumaðr* — アウズンは……最も幸運な男であると考えられた) と *Grettis saga Ásmundarsonar* 『グレッティル=アースムンダルソンの物語』 (*sitt er hvárt, gæfa eða sörvigleikr* — 幸運と武勇とは、別々のものである) とが有名である。

4) この物語のヒーロー二人について、次のようまとめられよう。

It is because Hrafnkell is chieftain by nature, and Sámr a man of inferior birth and character, unfit for the position in which accident had placed him, that Hrafnkell must triumph over Sámr in the end. (G. Turville-Petre: *Origins of Icelandic Literature*. Oxford, 1967, p. 241).

5) *spíót hans hit góða* この槍は、XIII 章の終りで述べられているのと同じ槍あろう。この槍に関する伝承があったことも考えられる (cf. *Hrafnkatla*, p. 41).

附 記

◎本文中の括弧について

< > 写本AM 156, fol. に欠けていて、底本の編者が追加した語句。

() 邦訳を理解しやすくするために訳者が加えた底本にない語句。

◎註の略語及び引用参考文献の説明

E	English
Goth.	Gothic
Lat.	Latin
MLG	Middle Low German
NI	New Icelandic
OE	Old English
PN	Primitive Norse

Grágás I: *Grágás*, udg. efter Haandskrifter i Det kongelige Bibliotek og oversat af Vilhjálmur Finsen. I, København, 1852.

Íslendingabók: Ari Þorgilsson hinn fróði: *Íslendingabók*. Utgitt av Anne Holtsmark. Oslo-København-Stockholm, 1952 (Nordisk filologi, serie A, 5. bind).

Landnåma: *Fortællinger fra Landnámabók*. Udg. af Jón Helgason. København-Oslo-Stockholm, 1951 (Nordisk filologi, serie A, 3. bind).

Hrafnkatla: Sigurður Nordal: *Hrafnkatla*. Reykjavík, 1940 (Íslenzk fræði: Studia Islandica 7).

KLNM: *Kulturhistorisk leksikon for nordisk middelalder fra vikingetid til reformationstid*. I ff., København-Helsingfors-Reykjavik-Oslo-Malmö, 1956 ff. (in progress).

AEW: Jan de Vries: *Altnordisches etymologisches Wörterbuch*². Leiden, 1962.

IED: R. Cleasby-G. Vigfusson-Sir W. A. Craigie: *An Icelandic-English Dictionary*². Oxford, 1957.

◎このサーガに関する専門的な参考文献

Sigurður Nordal: *Hrafnkatla*. Reykjavík, 1940. (English translation by R. G. Thomas: *Hrafnkels Saga Freysgoða. A Study*. Cardiff, 1958.)

Knut Liestøl: Tradisjon i Hrafnkels saga Freysgoða, in *Arv* II, Oslo, 1946, p. 94 ff.

Jón Jóhannesson: Formáli, in *Íslensk fornrit* XI. Reykjavík, 1950.

Marco Scovazzi: *La Saga di Hrafnkel e il problema delle Saghe Islandesi*. Arona: Paideia, 1960.

Hermann Pálsson; *Hrafnkels saga og freysgyðlingar*. Reykjavík, 1962.

Pierre Halleux: *Aspects littéraires de la Saga de Hrafnkel*. Paris: Société d'Édition "Les Belles Lettres," 1963.

詳細な文献は、次に網羅されている。

Islandica I, XXIV, XXXVIII. Cornell Univ. Press, Ithaca: New York, 1908, 1935, 1957.

(Osaka, January 1969.)